市芦救援会通信

市 芦 救 援 会 通 信 通巻49号 91/3·4合併号〈1部100円〉 発行人 玉本 格
市 芦 救 援 会 〒659 芦屋市剣谷9 市芦分会気付 TEL 0797(32)1131
市芦反弾圧闘争を支援する会 〒650 神戸市中央区元町通5丁目3の16 テーラビル3F

日程 / 5月16日(木) AM10～ 小林反対尋問

市芦の事情は関知しないと小林証人
問答無用の定数削減強行を証言

市芦救援会事務局

去る二月二六日、六人の先生の強制配転に関して、村田弁護士による小林元管理部長への反対尋問が行なわれました。まず、市芦教員の「適正な数」を「標準定数法」「県立高校なみに」と証言したことに対して、障害児コース制・教科複数担任制などの市芦独自の条件整備の実態を示し、他校との一般的比較で教員数は決められないと追及。証人は「いろんな事情があるにせよ標準定数法で削減」と、問答無用で生徒・教員切り捨てを強行したことを自から明らかにしました。

更に、それらの制度が廃止されたことについて、「削減の結果にすぎない」と居直りましたが、松本教育長が定数条例改正の市議会で「形骸化したので是正」「障害児が普通高校に入って幸せなのか」等と答弁した事実を書証として提出し、削減が教育つぶしを意図したものと追及。証人は「形骸化の根拠は不明」「障害児コース廃止は知らない、校長が学校運営でしたこと」とウソぶき、「定数減をめぐって学校体制が維持できるのか市教委として検討してきた」との証言がまったくのデタラメにすぎないことが明白となりました。

また、「行革による見直し」との主張に対し、近年の市財政の大巾な黒字の下での行革の必要性を追及し、かつての赤字財政下でも進学保障を維持し条件整備をすすめてきた事実を証人も認めざるを得ず、行革による削減が口実にすぎないことを明らかにさせました。

なお、四月八日の審理は、証人が直前に延期通告したため中止。公平委事務局に対しても一方的扱いに強く抗議しました。

も／く／じ

第33回公開口頭審理報告
市芦の実情に関係なく定数削減 管理運営事項と居直る小林証人……市芦救援会事務局 …… 2
特集・高校闘争 障害児の高校入学闘争 …… 市芦救援会事務局 …… 7
智哉の伊丹市立高校入学をお願いします …… 入江宏明・幸子 …… 8
入江君の進路保障についての担任の願い …… 11
要望書 伊丹・生活と教育を考える会 …… 14
私たちの訴え 入江智哉君の伊丹市立高校入学に際し …… 桝村隆義・照美 …… 18
障害児の高校入学を勝ちとるために 決議文 …… 21
定通つぶしを許さぬ会 申し入れ書 …… 22
活動日誌<抜粋> …… 23
私たちはまた高校の門に向って行く 抗 議 …… 24

第三十三回公開口頭審理報告

市芦の実情に関係なく定数削減 管理運営事項と居直る小林証人

市芦救援会事務局

村田　各県立高校と単純に比べただけで、その実情までは参考にしていないことですね。

小林　ええ、県立高校に準じて。

村田　各学校の実情にまでふみ入って調べたことはないでしょう。

小林　……コース制ということまでは、実情についてまで調べてません。

市芦の事情があるにせよ定数削減

村田　松本教育長は、他校に比べて市芦の先生は授業数が少ないと言ってましたね。

小林　……正確には……少ないというニュアンスはあったと。

村田　教師の負担というのは授業数だけでは比べられないんじゃないですか。

小林　……ええ……一つの尺度にはなると。

村田　他にはどんなことが。

小林　標準定数法で職員数を決めてるので、授業数では決めてない。

傍聴人（以下、傍と略）

質問にちゃんと答えよ！何聞いてんねん！

村田　先生の負担を授業数だけで考えるのか。

小林　……校務分掌とか……基本的には標準定数法に基づいて。

傍　何を答えてんねん。

村田　前田元校長は、先生の負担は授業数だけでは決められないと、とくに市芦では、とり出しのコースがあり教材の数も多いと証言されてる。そういうことの認識はしてますか。六二年一～三月段階で先生の負担を考える時にそういうことを考慮しましたか。

小林　……校長に相談しました。それを処置できると。

村田　前田校長は、県芦より市芦の先生の方がずっと負担が多く大変と認めてますよ。だから、先生が減ってもかまわないと言う筈がない。

小林　……市芦のいろいろな事情があるにしても、標準定数法でいくと……。

村田　では校長は、市芦はとり出しコースもあって大変だが、市教委の方から標準定数法でいくんだと言われたら、しかたがないやむをえないという風な発言をしたということか。

小林　まあ、それに近いですね。

複数担任制廃止の根拠は憶えてない

村田　松本教育長はふだんから県立高校と比較して、それにならうべきという指導を校長にしていましたね。

小林　よくおぼえてませんが、そういう形の指導はされていたと思う。

村田　複数担任制はいつ廃止と決めたのですか。

小林　……結果的に、職員定数が定められた段階で複数担任制はできないだろうということだったと。はじめに廃止するというのではなくて。

村田　松本教育長も複数担任制は形骸化していると発言してますね。

小林　どこで言ったかいってもらわないと。

傍　言ったら憶えてない言うやないか（笑）

村田　甲第一〇四号証（六二年三月一〇日市会本会議録）「市芦の複数担任制の導入当時はそれなりの効果も上っていたが、近年は、いわゆる勤務条件緩和にかたよるような、形骸化してまいりましたので、是正しようとするものです」と。

小林　……。

村田　市教委として廃止するという話は。

小林　……。

村田　根本的な方針の問題でしょう。

小林　……。

村田　あなたはどうなのか。

小林　校長からいろいろ聞いてましたから。

村田　どういうことを聞いてましたか。

小林　なんというか……、どういうんですかね……まあ……先生が休みやすいとか、実際は一人で授業が行なわれてるとか。

村田　具体的に細かい調査をしたのですか。

小林　……したこともあると思う。

傍　ウソつくなよ！

村田　たとえば書面は残ってるんですか。

小林　……それはどうか憶えてません。

傍　ええかげんなこというなよ！

村田　形骸化というんだから、その根拠は何なのですか。それなりの資料に基づき判断しているだろうと思って聞いているんです。先生方も年休をとることもあるでしょう。

小林　……よく憶えてませんね。

「適正な運用」とは「適正な運用」

村田　市教委として六一年当時、同和行政の見直しを考えていたと。

小林　五九年位からですね。

村田　同和教育は不要になってきたと。

小林　いえ、そんなことはないです。

村田　必要であるが人数は必要でないと。

小林　そうですね。

村田　同和行政のあり方について、同和対策審議会から答申が出てますね。六〇年四月の中間答申、一二月の基本答申、そして六三年一〇月に最終答申が出てますね。

甲第一一〇号証（『市教委四〇年史』抜粋）に載ってますが。

小林　これは知りません。みたことないです。

傍　ウソつけ！　配布されとるやないか。

村田　六一年一二月の基本答申が出てますが、進学保障について、「多くの子供の高校教育の保障に努めてきた市立芦屋高校の役割は大きなものがある」との評価をしてますね。また、「子供の成長過程と自覚に照らした厳密な運用による進学保障措置をとりなさい」とありますね。

小林　私はみたことない。

傍　これは答申やぞ、怠慢やぞ。

小林　答申は見たことあると思いますが、これは『四〇年史』でしょう。

村田　本の中に答申が入っている。あなたは答申を見てないんでしょう。（笑）

最終答申には「困難な条件下にある子供の進学の保障に努めなさい」とある。これは認識してますか。

小林　認識ということがよくわかりません。

村田　認識した上で、充分配慮した施策をすすめたかということですよ。

小林　進保については厳密な運用をせえとかいてある。市教委の方針は変ってませんので。廃止したわけでなく、やってますので。

村田　行革大綱があってもこの同和対策審議会答申

としては市芦の進学保障制度を評価し、将来的にも継続していかないかんと、その中であなたは行革大綱の優先を考え、答申の精神を市教委はあまり配慮しなかったんでは。

小林　……いや、両方とも考えながらやった。

村田　進保の見直しと言ってるでしょう。

小林　適正な運用です。

村田　では、適正な運用とは具体的に何をさすのですか。

小林　……具体的に、進学保障というものの主旨をよく理解してやると。（爆笑）

傍　何にもわからへんぞ。

村田　抽象的で何も具体的ではないでしょう。

小林　具体的とは、今でた程度のことで……

村田　適正というには、従来こんな問題があったとか何か具体的に考えがあったんでは。

小林　いや、適正なる運用をと。

村田　もっとわかりやすく言って下さいよ。

小林　……それ以上いうことはない。

村田　教育長もこの同対審のメンバーですね。

小林　しりません。

傍　なんということを！

障害児コース廃止は知らない

村田　市教委として障害児の教育について、六一年当時どのように考えてましたか。

小林　私の立場ではお答えできません。所管ではないので。

村田　松本教育長は市会本会議で、障害児は養護学校にいった方がいいかのような発言をしていませんでしたか。

小林　よくおぼえておりません。

村田　先ほどの甲一〇四号証で、「障害児の進路につきましては、はたして子供を普通科の高校に進学させて幸せになるのか、あるいは養護学校に進学させた方が幸せになるのかを考えていかねば」とあります。こういった発言は障害児は普通高校にいくべきではないということを言ってませんでしたか市教委は。

小林　……いや、そんなことはないと思う。

村田　現実に六二年四月から、市芦では新一年から従前あった障害児コースは廃止されたでしょう。

小林　しらない。

傍　そんなバカなことあるか。

村田　学校の実態をあなたは把握してるの。

小林　知りません。学校の運営に関することは校長がしてて、私の知らないこと。

村田　校長の判断でできることではない。体制や先生の裏付けの問題でしょう。

小林　……市教委がすべて知ってるわけではない。学校教育の部門があって校長と相談してる。

村田　それは部門がちがうという問題ではなくて、まさに、定数条例の改正に向けて定数管理をして、市芦の先生が六人減って、その中でどういった体制が維持できるかと検討してきたとあなたは証言してきたわけですよ。先生がいなくなれば障害児コースが従前どおり維持できるか、という問題を当然議論した筈ですし、あなたは混乱がないようにと指示したというし、だから聞いているんです。

小林　……それは……

村田　従前、市芦に障害児コースがあったのはしってますね。

小林　……はい。

村田　人数が減るから維持できるかという検討をしなかったわけですか。

小林　そういうことについては、校長は維持できるということですから。

傍　本当にそう言ったんやな。

村田　新一年生から廃止されて、二・三年生のコースも先生がいなくなったがために充分できなかった。前田校長は混乱があったことを認めておったと。

小林　私は大した混乱はなかったと聞いてる。

赤字でも進学保障は続けてきた

村田　行革大綱は五〇年の財政危機の時からおこなわれてきましたね。この障害児コースはいつからおいたのですか。

小林　五〇年のはじめ頃かと。

村田　進学保障は四六年からで、五〇年頃から芦屋市は赤字の中でも、教育を大事にして進学保障もすすめてきたんでしょう。

小林　……。

傍　なんで答えへんねん！

村田　前回いわれた「一人一人を大切にする教育」というのが市の基本ですが、それを実践してきた歴史的背景があるんではないですか。

小林　……。

村田　それはお認めになるでしょう。

小林　……そういうことですすめておることは知っております。

村田　赤字はいつまで続きましたか。

小林　……五五年位ですか。

村田　この一〇年位は大巾な黒字ではないですか。

小林　……大巾というのは……まぁ黒字と。

村田　赤字の時に進学保障をおしすすめて、黒字の現段階でこれを見直すというんですか。

小林　……いろいろな時代状況があって、行革がおこなわれているということで。

村田　では、定数削減というのは、行政改革とかの問題ではなくて、松本教育長のいういわゆる教育改革とかの問題に端を発っしているのではないですか。

小林　……行革という、日本国中の時代状況の中で、教育も例外ではありませんので。

村田　自治体の財政事情によっても違ってくると思いますが。

校長に異動希望調書をとるなと指示

村田　六一年一一月一四日に希望退職を募集していますね。市芦で。これがはじめてか。

小林　どうなんですかね。

村田　どういう理由でこの時期に募集したんでしょうか。

小林　退職される希望者があればということ。

傍　（笑）とぼけるなよ。

小林　職員数が多いという中で、退職してもらっても結構ですよということでした。

村田　行革大綱は前年の秋に出てる訳ですから、前年の六〇年には募集したことはなかったですね。

小林　そうですね。

村田　例年秋頃、異動希望の有無を先生方全員に書面でとってましたね。六〇年の秋はとらなかったようですが、どういう理由か。

小林　とらなかったんではなくて、希望はきいたと思いますけど。

村田　書面ではとらなかったでしょう。

小林　はぁはぁはい。

村田　市の職員は全員とるでしょう。毎年。

小林　自己申告という制度で、本人の希望をきいたりする。

村田　六一年の秋、市芦以外の市職員についてはこの書面をとりましたか。

小林　いえ、とってません。

村田　とってませんか。

小林　はい。

村田　この年だけとらなかったんですか。

小林　六一年秋には市職員全員に転出希望などとったことはないと思う。

村田　秋でなくても冬とかに。

小林　二月頃には市職員に対して自己申告ということで希望をきくという制度はある。

傍　さっきからそれを言うとるんじゃ！（笑）

村田　市芦で書面をとらなかったのはあなたの指示ですか。

小林　ええ、校長の話で、転出希望を出さない運動を職員がやってると、私は、そんな運動をやっておられるのだったら書面を出すことはないんじゃないかと、こういった記憶があります。

定数減は管理運営事項、話合い不必要

村田　一二月に前田校長を予算の問題に関連してよんだと、その時、定員削減の方針を伝えて協力を要請したとの証言ですが。

小林　校長としても市芦の教員数は多いという認識をされておる訳ですから、今後、減った中で学校運営をやってもらうようにと。

村田　根本的に学校の体制が変わることで、先生の身分に及ぼす影響も大きいので、十分に論議して下さいとか、先生方の協力が得られるように話をして下さいとかは指示しなかったんですか。

小林　ええ、そういうことはしてません。

村田　要するに管理運営事項だから一切話をする必要はないと考えてたんですね市教委は。

小林　そうです。

一クラス減を前提に定数削減

村田　条例改正について、六二年一月下旬に市教委としての方針が固まったとの証言ですが、市長部局と事務レベルの協議をしたんですね。

小林　はい。

村田　それで二月一三日の教育委員会に提案となるんですね。このための協議はどのぐらい行なわれたんですか。

小林　その二月一三日の会で討議したと。

村田　つまり提案して即可決したということ。

小林　はい。

村田　具体的にどういう議論がされたのか。

小林　憶えてません。

村田　短かい時間内で、さほど論議されてないのでは。

小林　協議会などでいろいろ論議されて、最終的には教育委員会で決めたと。

村田　二月一三日の教育委員会の中では、進学保障制度についての議論はなされたのか。

小林　さあ……。

村田　では、この時の案は、一二クラス、三二名と計算してたでしょう。ということは新年度は一クラス減るということを前提にした訳ですね。

小林　いや、一クラス減るということじゃなしに、一二クラスということで判断してた。

村田　この段階は、障害児コースをなくすとか、進学保障生徒を減らすとかもだいたい決めておったんではないんでしょうか。

小林　いや、それは決めてません。

村田　ではどういうことか。

小林　いや、クラスというのは、中学校からの希望者は、だいたい一月の中旬には把握できてますから。

マスコミにも市芦改革と発表

村田　二月一三日の教育委員会の決定をマスコミに発表しましたね。

小林　はい。

村田　甲第一〇七～一〇九号証（新聞記事）市芦の大巾改革と、複数担任制機能せずとか書いてあります。これは市教委の方がこういった発言をしたからこんな記事になったんでしょう。

小林　……。

村田　どうですか。

小林　……よく憶えてません。

村田　この記事の中にも行革大綱ということはまったく一言も出てきてませんね。市教委もそのことを言ってないんですか。

小林　別にそのことを言ったか言わなかったかというのは関係ない。

村田　この新聞記事への反響は非常に大きかったんではないでしょうか。

小林　さあ……。

村田　この二月二六日の記事で、市議会の各議員もはじめて知ったようですね。

小林　議案発送をした後に記者発表をしたんだと思います。二八日から議会は始まってますから。

村田　市芦の先生方にもどうして伝えなかったんですか。二月一三日に議決したあと。

小林　……伝えませんでしたね。

村田　必要性を認めなかった。

小林　そうですね。

村田　理解を求めるとかを考えなかったのか。

小林　……。

村田　事前に議論をすべきと思いますが、事後にさえそういうことをしてないのはなぜかと思って聞いてるんですが。

小林　……。

特集・高校闘争

障害児の高校入学闘争

市芦救援会事務局

今年もまた障害児の親と子の高校入学がきびしく闘われた。四年前市芦がつぶされ、ムー君、ジュン君らが落とされて長い在宅の一年、麦の家を創り出して西宮西高校に入学を勝ちとった闘いは、確実に阪神間の親の会の闘いにつながり、より大きな流れに合流している。

二月一〇日、「障害児の高校入学を実現させる交流集会」が、障害者問題を考える兵庫県連絡会議（障問連）主催で開かれた。各地域で普通学級への門を叩きつづけてきた親や教師たちが、はじめて全県レベルで高校闘争をうつため集まった。神戸、西宮、尼崎、伊丹、川西、宝塚で障害児たちが高校に挑む。今年の闘争は「親の会」の拡がりを支えとし、団子になりながら元気に闘われていった。

今号では、県下で最も熾烈に闘われた伊丹の入江君の闘争を紹介する。伊丹西中学から市立伊丹（定）を目ざした闘いは、一昨年の部落解放同盟伊丹支部の援助による桝村君の入学を勝ち取った闘いを支えとして、「生活と教育を考える会」が中心となって、阪神間の多くの親の支援を得て闘われた。

三月三日、「障害児の高校入学を勝ち取る集会」が伊丹で開かれた。伊丹をはじめ阪神各地からの多くの親の会が参加し、全障連、障問連、兵高教、兵教組、定通つぶしを許さぬ会など多くの支援の人々ら一〇〇名余が参加した。

入江さんは「小学校就学前に市教委に呼び出され、大勢の役人に囲まれて障害児学級にしろとせまられた。今度子供が高校に行くといった時、まともに会ってもくれない。校長は〝0点は困る〟〝仕事して疲れて来るので迷惑をかけては困る〟と言う。今までうんと小さくなって生活してきて、それでも困るといわれたらどないしたらいいんや」と怒りをこめて話をされた。

宝塚の全さんからは、「児玉君の介護で行って、教室に一人残して押し込むようにしてくる。後ろ髪引かれるような思いがして、本当にこれでいいんかなと思う。でも、髪の毛をまっ赤に染めた子、ソリコミいれた子らも、しんどい仕事してきて勉強いっこもしてへんのに、学校にくる子ら何を求めてくるんやろかなということに私らが思いを向けていかんと、障害をもってる子がそこへいって何をするんかということも見えへんのとちがうやろか。うちらの子どもも孤独やけど、周りの子も同じやということに気づかんかったら、そこで生きていく意義、通い続ける意義は見い出せへんのとちがうかなって思う。来年もこんな集会があったら、一六、七才で社会で一番しんどいとこで仕事してるあの子らがこの前に座ってわたしらの子どもを応援してくれたら、それがほんとに私らの子どもにとっての地域やと思うし、生きる場やと思う」と、本当に生きる場ってどこにあるのかを追い求めていく「視点」を明確に示す話だった。

三月一九日、一年間の自主登校を続けての再挑戦で宝塚の児玉君が見事に尼崎南高校良元分校に入学。しかし翌二〇日、伊丹市高は定員を大きく下回った中でも入江君一人を落とした。校長は逃亡し、市教委に対する抗議行動がとりくまれていった。

そして入江君は二次試験を受験するが、再び定員を下回る中、一人だけ落とされた。市高校長に対し交渉に応じるなとの圧力をかけた市教委に対し親子の肉声をもって交渉を続けている。闘いはまだ続く。

91高校に挑む

1　入江君を伊丹市立高校へ

智哉の伊丹市立高校入学をお願いします

入江宏明・幸子

智哉は今年の春中学を卒業します。幼い頃は、さわがしいのが嫌い、人とかかわることが嫌いでいつも両耳を両手でふさいでいました。でも小学校中学校の先生方や友達とのかかわりの中で全くといっていい程やらなくなるまでに成長してきました。とは言ってもやはり勉強はあまりできません。おそらくテストで点もとれないでしょう。こんな智哉を伊丹市立高校に行かせたいと願っていること自体、先生方はなんて非常識なことを言う親だと思われるでしょう。私も智哉を高校に入れることなど数年前まで全く思いもしませんでした。

智哉は三才半ぐらいから、伊丹市内にあるつつじ学園に入りました。私自身ほんとに呑気というか楽天的というか、とにかく何も知らなかったので精薄児通園施設とあるけれど、一年も通えば、うちの子はきっと普通の子になるだろう、そんな軽い気持ちで入園しました。入ってみたら同じようなタイプの子がいっぱいいて、智哉もやっぱり障害児なんだなあということが少しずつ少しずつ、すごく時間がかかりましたが、自分の中で受け入れられるようになりました。つつじ学園では母親教室とか講演会とか親はいろいろ勉強させられますが、そんな中で障害をもってる子は、ほとんどが障害児学級なり養護学校に行く。義務教育が終わったら、みんな高等部、そこが終わったら更生施設、授産所です。そういう所へ行くのがあたり前みたいに私も思っていたし、まわりにいるお母さん達もほとんどそうでした。ですから何の迷いもなく小学校は障害児学級にいれました。

小学校の五年・六年は子供の状態もわりとよく、周りの子供達の関わりもすごくたくさんありました。たとえば、マラソン大会の時に伊丹の瑞ケ池という大きな池を二周するのですが、智哉は遅いから殆どの子がゴールしてもまだ半分くらいしか走っていなかったのです。あの辺を走っているなあという感じで見ていたら、マラソンでゴールした子供達が何人も逆にコースを回って、智哉を迎えに行ってくれていました。「ファイト、ファイト」と励ましながら、みんなで走ってきてゴールインしたのです。ゴールする時も、女の子が汗ふき用に持っていたタオルをゴールテープにしてくれてゴールインしました。子供達の中からそういう行動が出た…ということがもう嬉しくて嬉しくて、テレビの青春ドラマを見ている感じでした。

また担任の先生も、今日はこんなおもしろいことがあった、こんないいことがあった、こんな楽しいことがあったと結構連絡帳に書いてくれました。その字を読むだけでは私も満足できなくなってそういう場面を見てみたいなあという感じで、ちょこちょこ学校の方に授業参観にいきました。体育を運動場で見ていたら、授業が終わって他の子供達が「おばちゃん教室にもおいでえや」と言ってくれたので、「ほな教室行くわ」と言って教室で授業を見せてもらいました。そうしたら智哉がすごく楽しそうにしているのです。授業はもちろんわかる子ではないので、授業そのも

のは本人にとってはつまらないでしょうけれど、時々智哉が全然授業に関係ないことを言ったりすると、先生も子供達も、大笑いして、とてもリラックスした雰囲気になるのです。その次の時間、障害児学級に行く時、また続けて参観しました。先生と一対一でプリント学習などをしていました。何か全然違って見えるのです。普通学級にいる時は生き生きしていて本当に楽しそうなのに、障害児学級にいる時は目が輝いていないというか、本当につまらなさそうにしているのです。私も小学校に入れる時はせめて「読み・書き・計算」ぐらいできるようになってほしい、この子には絶対これが必要なんだという思いで障害児学級に入れたのですが、勉強なんか少々できたってその先世の中に出ていって就職なんてとてもできる状態ではないし、もう勉強なんてどうでもいいわ…学校生活を楽しく過ごさせたいと思うようになったりもしました。

義務教育は中学までしかないと、少し感傷的なところもあったかもしれませんが、中学から普通学級に入れました。不安だらけでした。いじめられるとか、子供達みんな部活とか自分のことが精一杯でほったらかしになるよとか言われながら、すごく不安な気持ちで入学しました。一年生は心配していた事がまるでうそのように智哉も喜んで登校するし、たまに学校で見かけると、智哉の周りには数人子供がいて、いつも輪の中に智哉がいました。球技大会や体育大会も予想をはるかにこえた頑張りを見せてくれました。

二年生の六月頃、なかなか自分の意思でものを言う子ではないのですが、「水泳部にしようかな、水泳部プールしようかな。」と初めて智哉の方から意思を伝えてきました。学校に入部希望を伝えましたが、一週間たっても二週間たっても返事がもらえませんでした。日にちばかりが過ぎ、智哉も落ち着かなくなってイライラする日が多くなりました。智哉は水着さえあれば水泳部に入れると思ったようで、お金も持たずに購買部に行き「水着ください」と言っていたとクラスの子が教えてくれました。きっと障害児ということで許可されないのだろうと思い、プールの中での様子を見てもらおうと全校クラブの一時間、水泳部に参加させてもらいました。私は智哉は水に入れたことでうれしくてはしゃぎまわるだけだろうと思っていました。ところがろくろく泳げない子なのですが、やったことのない飛び込みを腹打ちになりながらやったのです。あのこわがりの用心深い子が。みんながクロールで泳いでいるから、自分もクロールらしく泳ぎ始める。その次に平泳ぎにかわったら、自分もなんとなく平泳ぎらしく泳いで、背泳ぎになったら背泳ぎらしく泳ぐのです。そんな姿に目頭が熱くなりました。それでも許可されず、話し合いの末、いくつもの条件付きでやっと入部することができました。

二学期になり、プールの季節が終わっても、智哉はなぜか落ち着きませんでした。私は気になりちょくちょく見に行くと、いつも一人でいるのです。去年は、いつも周りに誰かがいてくれたのに、いつ見ても運動場の隅っこの方に一人ポツンといるし、忘れ物を届けに教室に行ったら一人でお弁当を食べていました。なんで一人なんやろう。小学校、中学校一年生と、特別扱いではなく、友達みたいな感覚でみんながかかわってくれているように私には見えていたのですが、子供達が、何故こんなに変わってしまったのだろうと、すごく淋しく思いました。家に帰ってきた智哉のカバンの中を見ると本、ノート、筆箱にまで歯型がついているし、筆箱の中を見ると、エンピツまでカリカリとかじるようで、エンピツのカスが筆箱一杯に入っているのです。新しいエンピツ五本持たせても一週間もちませんでした。せめて、「いやや」「しんどい」とか言ってくれると智哉の気持ちも少しは分かるのとはがゆく思ったものです。でも智哉は一人ポッチでも、泣いていても、いじめられても、毎朝時間になると登校するのです。私はそんな姿をいじらしいなと思いながら見ていました。

もう籍なんてどうでもいい…智哉にとって

どうすることが一番いいのか考えました。悩みました。落ち込みました。どうしようどうしようと迷い続けたまま三年生になりました。そんな一人ポッチになっている智哉のことを淋しく思い、友達にいろいろグチをこぼしてしまったところ、「学校に何かをしてもらおうと期待したらあかん。」「周りに期待したらあかん。」「学校に見に行ったら、腹も立つから見たらあかん。」と言われ、今まで私が考えてきたことが全て否定されたようで、何のために普通学級に行っているのか、余りにも淋しいなと感じました。学校や周りに期待せずに、ただその場に居るだけだなんて淋しすぎる、何のための普通学級なんだろう、と思ったりしました。

今まで私は「障害をもった子を中心に」してもらえることを期待し、周りとの関わりをたくさん望んできました。皆と一緒にいろんな経験をさせてやりたい、思い出もたくさん残してやりたい、周りの人達にも智哉という障害児を少しでも知ってほしい。そのことで、障害者が生きていける住みやすい世の中になると、そう思ってきました。しかし、現実はそうではなかったように思います。「周りに期待したらあかん。」と言われて、淋しかったけれど少し楽になったような気がしました。そして、少しずつ智哉や周りの子供達に対しての私の見方が変わっていったように思います。

そんなある日、体育の時間、準備運動でマラソンをしていました。チャイムも鳴り皆グランドを走り出したのに、智哉の姿がありません。どうしたのだろうと見ていると校舎の影からひょっこり出てきて皆より半周程遅れて一人で走り出したのです。以前の私なら「又、一人や、どうしてさそって走ってくれないのか」と落ち込んだでしょうが、この時は少し違いました。誰に言われたわけでもないのに皆に追いつけなくても半周遅れでも一人で走り続ける姿を見て、周りに友達がいてくれるというのはこういうことなのか、みんなと一緒というのはこういうことなんだとその時思いました。

中学校生活も残り少なくなりました。しかし、これまでもそうであったように、子供の進路を考える時、親は悩み続けます。しんどくて全てを投げ出してしまいそうな時もありました。この子さえいなかったら…そんな気持ちがふと頭をかすめます。でも親は子供から逃げだせません。最後はやはり智哉の為に今一番大切なものは何だろう、一番必要なものは何だろうと懸命に考え自問自答しながら少しずつ気持ちを整理してきたつもりです。

近頃智哉は「三月十三日西中学校卒業式、一九九一年四月入学式…」と言ってじっと私の顔を見つめます。次はどこに行くのか教えてと言っているのです。何でも一人でやりたくて、ワープロを使ってみたり、テレビ番組で覚えた料理を作ったりします。お風呂に入るのも、寝る時も、外出までも「一人で」と言っています。親から離れようとしているようです。その智哉を中学卒業後も同世代のいろいろな人達と共に生活できる場所に行かせてやりたいのです。そのような場は、伊丹市立高校しかないのです。不安です。手助けしてくれる友達もいないかも分かりません。でも皆と生活することでもっといろんなことを学ばせたい、感じさせてやりたいと強く願っています。

どうか伊丹市立高校の門を開いていただきたいと心よりお願いいたします。

一九九一年二月

（13ページよりつづく）

以上、私の感じている限りの入江君と学校、親とのかかわりを拙い文章ですが書き記しました。是非とも貴校の教職員の皆様に親の要望書と共にお読みくださる事をお願いすると共にこれら「障害」をもつ生徒達が地域の同世代の子供達と共に生き、学び、暮らしていける場を設定して頂けるよう親と共に、切にお願い致します。

伊丹市立西中学校　三年一組担任　古城門克己

入江君の進路保障についての担任の願い

三年生という大切な年、来春にはそれぞれの進路に向けて巣立っていく生徒達ですが、現状では決して楽な見通しばかりではありません。とりわけ、「障害」をもった生徒には厚い壁、いや、ほとんど開かれていない進路の前で大きな不安と苦悩の毎日です。

入江君は、小学校時代を「障害」児学級に在籍しましたが、中学は両親の強い願いの中で、普通学級での中学校生活を過ごし、三年生になりました。私は三年生になって初めて入江君の担任になりました。初めてのことで、不安の中でのスタートでしたが、驚きや発見の毎日でした。

「智君、シー」「大きな声を出してはいけませんよ。」と生徒が注意すればたいていは静かに頑張るのですが、どうしてもダメな時間があるかと思えば、次の時間は黒板に英語を書き初めてリーダーシップをとったり。連絡帳で朝気げんが悪いと書かれてあって、注意をしていると非常に気げんが良かったり、またその逆もありました。

朝、バスを見ていて、時間に遅れて入ってきたときなど、本当に悪かったという顔をして「時間に遅れてきてはいけません。オシリ、パチン」と自分でおしりをたたいてみせるわけです。長い時間の集会や静かな授業は、時には耐え切れずに大きな声になり、騒々しい場面は涙声になってしまうこともあります。

また、自分が計画している帰ってからの行動のために、終礼が長引くと「三時十五分には自分で「起立、礼、さようなら～。」としきってしまいます。あるいは泣き出してしまうことも何度かありました。しかし、また、決めている休み時間の冒険で（体育館の裏や新しくできた武道館、時には保健室に入りこんでベッドでねたふりをしたり）自分なりに学校生活を楽しみ、気分転換をしているわけです。そうした入江君の行動に初めから学級の友達が好意的であったわけではありません。どう対応していいのか分からない生徒のほうが多く、からかいやいじめの対象として対応する生徒も中にはいたことも事実でした。しかし、時間がたつにつれて、入江君の心の動きがわかってくるにつれ、いつしかクラスの中心として位置づけられていくのがわかるようでした。職員室や廊下で、クラスの生徒と出会うと「先生、智君がね、」という声が多くかかってくるようになってきたのをとても嬉しく感じていました。クラスの中で、無くてはならない存在に、それと共に、入江君もクラスの生徒も変わり始めたのは事実でした。毎日の連絡帳の中でも、嬉しい報告ばかりです。どんなときでも、朝きちんと自分で用意をしていくこと、家の手伝いをよくしていること、そして、かなり落ち着いて学校でも家庭でも生活している様子が書かれるようになってきました。終礼時に私が書いているとき、男子が入江君の生活ぶりが書かれているのを読んだり、今日あったことを報告してくれたり。入江君の話を通して生徒との会話が弾みます。時にはからかいながらも、入江君に声かけをする生徒が増えてきたのです。

伊丹養護学校のY君との交流が決まったときも、一組との交流ということで生徒達はかえってよろこび、背の高い男子が車イスでの階段移動の役をかって出てくれました。そして、入江君も眠っているY君になにかとふれて、声をかけながらずっと側で関わっていました。「かわいそうな」という同情からではなく、「障害」をもった人と自然に関われる姿勢が入江君と共に過ごしてきた中で育ってきたのだと思いました。

球技大会の優勝、伊丹養護学校のY君との交流とクラスにとっても非常に有意義な一日でした。当日の入江君は、バレーボールもボールを怖がらずに一員として取り組めました。

チームメイトもお客さんとしてではなく、励まし、時にはおこってゲームに共に参加し、最後の万歳もみんなでやって喜んでいました。Y君とのお別れもクラスでやったのですが、入江君が最後まで側にひっついていました。気を利かしてドアを閉めたときに発作が起きてしまったのです。「ごめんね」と何度もあやまっていましたが、その姿を見て「自分が助けてあげなあかん。」という意識と悪いことをしてしまったという思いがよくわかり、いじらしく感じました。

修学旅行でも事前に、服装違反の生徒がいてみんなの前での指導中、入江君が突然彼の前に行って、顔を軽くたたいて「いけません。ごめんなさい。」と言い、クラスみんなもあっけに取られたことがありました。その後は席にかえって、「たたいてはいけません。おしりパチン。」と泣きながら反省をしていたのですが、わたしが言っていたことで、きちんとした形で出来なければ修学旅行はとりやめだという言葉を覚えていたらしく、自分が計画表まで作って楽しみにしている旅行が中止になるかも知れないと思ったらしいのです。自分の世界にいつもいるようで、きちんと私やみんなの話も聞き、そして、クラスのこともよくわかっていることに驚いたできごとでした。無論、楽しみにしていた旅行も楽しく入江君を囲んでクラスがまとまれた行事になったことは言うまでもありませんでした。行きのバスから自分で作った計画表をもとに次のスケジュールを私達に告げてくれます。「九時三十五分新大阪、新幹線出発」生徒に配布する前からのしおりを自分で職員室から持ち帰り、自分でつくったしおりをすべて覚えての修学旅行でした。バスのなかでは歌を歌い、自由行動ではきちんと班行動も出来て心配する事もなかったようです。風呂では、入るとすぐにオシッコをしたそうですが男子が慌てて水をかけて入江君をおこったそうです。夜の学年レクリエーションでは、クラス代表の出場ですが入江君も飛び入り参加でした。指名された教師が歌う演歌も知っていたのかステージの横まで出ていって横で歌い切ってしまいました。夜の消灯後は外出禁止。かなり暑い夜でしたが、部屋にいる生徒達も勝手にクーラーをつけるわけにもいかず、入江君はふとんのなかで「暑いね。お茶飲もうかな。飲みたいな。」をくりかえしてなかなか寝つかれなかったそうです。たまりかねた班長が、職員の本部に来て「先生すいません。消灯後ですが自分の班がお茶を飲みたいので、特別許可して下さい。」と理由を言って許可を取りに来たというようなこともありました。消灯後に問題行動が起きがちなため、厳しめに指導していたのですが、班長も迷いながら、勇気をもって許可を取りに来たのでしょう。「何とかしてあげたい。」という気持ちと「このままでは寝れない。」という気持ちが伝わり、担任としてはとても嬉しく思えました。部屋の中はかなり蒸し暑く、入江君も他の生徒も汗びっしょりで起きていました。許可するとあらそって廊下のお茶を飲みにいきました。

また、特に毎日の生活の中で何かと面倒を見てくれたTさんには頭の下がる思いです。Tさんはバレー部に所属して活発である反面、孤立しやすく二年生のときには友人関係で悩んでいた時期がありました。しかし、一年生のときに一緒だった入江君と同じクラスになり、明るさを増し、クラスと入江君とのかけはしになってくれました。ずっと、自分から隣の席になってくれ、教師が関わり切れない部分をしっかりと補ってくれました。時には、まるで母親のようにほめたり、しかったり、時には強くつねられるという逆襲にあいながら、関わってくれます。まじめ過ぎてクラスから浮いてしまいがちなTさんが入江君を通して周りの友達と交わり始めるようになり、Tさんをクラスが認めていくようになったわけです。あるいは、普段はおとなしい女子のグループや男っぽい男子が入江君にどんどん声をかけて関わっていきます。入江君の書いた「あしながおじさん」や「アンパンマン」

がいつも、黒板の横に掲示されています。入江君の立場で、視野でクラスの生徒たちが物事を考え始めたのです。入江君にできることとできないこと、させなあかんこととさせたらあかんことを考えてくれるようになったことです。今では、チャイムに遅れて教室に入ってくることもほとんどなく、また遅れても悪かったという顔をして「遅れてはいけません。」と言いながら入ってきます。お茶の係は絶対に忘れずに後片付けまでやれます。忘れ物もまずなく、月や週の行事はほとんど完璧に覚えています。コマーシャルやバスの路線図などの暗記力はいつもみんなを驚かせています。

体育大会でも、むかで競争などはもちろん列の中で、みんなとあしなみをそろえ、時には入江君を引っ張りながら、追い込みましたが惜しくも二位。総合も応援コンクールもすべて二位。入江君は応援コンクールでも主役でした。入江君を通して、どこかでつながろうとする、団結しようとする力の結果なのかもしれません。入江君の母親が求めてきたものはこれだったんだなあ、と感じられるようになってきました。「共に生きること」のための学習を入江君もクラスの生徒も日常の学校生活の中で行っているわけです。

入江君は幼少の頃より、つつじ学園、幼稚園、小学校の養護学級と過ごし、西中では普通学級の中で三年間を過ごそうとしています。「障害」をもっているから、この進路しかないという現状の中で、お母さんも懸命になって入江君にとって一番良い進路を模索され、その度に迷われながらやってこられました。西中での生活も背中の靴跡があったり、ひとりぼっちの場面がかわいそうに見えたり、いたずらでカバンや筆箱が切られていたり、マラソン大会での悔しい思いなど多くの苦労や腹だたしさをも感じられることもあったに違いなかったことでしょう。あるいは、「学校に迷惑をかけないように、少しでも良い状態で登校できるように。」と陰でたくさん入江君や私達を支えてきたことでしょう。しかし、そんな中でも嫌がらずに自分で準備して登校し、遅れながらも失敗しながらも集団の中で生活してきた成長とありのままの入江君の姿を見せることで集団を変えてきた経験から、迷われた末に、地域の生徒達と一緒に進ませたいという結論を見いだしたのだと思います。

わずかばかりの学校での入江君との生活ですが、私も生徒達も多くのことを学びました。学期当初は、クラスの中心にとかなり意識をしていたスタートでしたが、入江君を知るにつれ、もっと自然に生徒達は毎日の生活を送っています。共に一人の人間として認めあい、必要なときには助けあうということ。入江君を理解するにつれ、その大切さを学んできました。私も三年生の担任として、「何とか進路を保障しなければ」という考え方から「入江君の成長にとって、大切な進路を」と考えていけるようになりました。学力や能力で進路が選択されている現状で、多くの生徒達は厳しい状況の中にあります。しかし、だからこそ、生徒にとって本当にあった、その生徒をいかせる進路を学校が保障しなければならないということを改めて感じています。「障害」をもった生徒にとっては、養護学校という進路しか開かれてはおりません。また、卒業後の進路も多くの不安を抱えています。入江君のように多くの同世代の生徒達と触れあい、もまれていく中で、確実に「生きる力」をつけてきた生徒達に同じような義務教育終了後の進路は保障されていません。みんなの様子を見ながら、自分で判断して行動できるようになってきた入江君が、定時制高校の中でまた多くのことを学びとってくれることを確信しています。また、周囲も入江君から多くのことを学びとってくれると思います。そのためにも、ぜひ、伊丹市立高等学校へ進ませたいという担任の強い思いです。

（以下10ページ左下へつづく）